元司法研修所教官コラム❸

和光雑感

Tomoe Kitagawa
【当会会員】北川 朝恵（57期）
元司法研修所教官（刑事弁護）

◆「起立。礼」始業のチャイムが鳴ると、号令係の修習生の声が和光の階段教室に響く。今でも懐かしく思い出す風景である。コロナ禍により、73期集合修習からはオンラインによる修習が続いているが、73期導入修習まではこのような風景が各教室で当たり前のように見られた。導入修習では全修習生22クラスが一堂に会するので、22もの教室が修習生で埋まり、圧巻である。A班B班（注：集合修習では22クラスをA班B班の2つに分け、11クラスずつ行う）両持ちの教官は、A班の講義が終わると次のB班の講義に向かうためダッシュで階段を上り下りするといった光景もよく見られた。体力勝負である。

◆授業中、教官席からは修習生の顔が意外とよく見える。階段教室の一番上の修習生が寝ているかどうかもよく見える。講義は基本1コマ100分なので、教官も大変だが修習生も大変である。しかも、教官は自分の講義が終われば教官室で一休みできるが、修習生はそうはいかない。僅かな休み時間を挟んで、夕方までみっちり講義が詰まっている。私が修習生だった頃は（57期）、前期修習3か月、後期修習3か月と時間的にも比較的余裕があり、自宅起案日など実質休みの日も多く、ソフトボール大会やクラス旅行など遊びの企画も多かった。というより遊びの企画しかなかった。今の修習生は、3週間の導入修習で5つの科目を詰め込まれ、ほぼ何も分からないまま実務修習に行ってらっしゃい、となる。導入修習の最後の講義で激励の言葉を送るが、修習生からは毎年のように「こんな状態で実務修習に行って私はやっていけるのでしょうか」という言葉を聞く。しかし、私は「絶対大丈夫」と答える。なぜなら、実務修習を終え、和光の集合修習で再び集ったときに見る顔つきからは、導入修習のときに見たあのあどけなさは消え、皆一様に引き締まったきりりとした顔つきになって帰ってくるからである。たった数か月でこんなにも成長して帰ってきてくれたこと、教官冥利に尽きる瞬間である。

◆講義の中でも、特に起案講評の後は大変である。起案の講評が終わると、修習生が列をなして教官室の外の廊下で待機している。自分の起案成績について面談を求めてくるのである。私が修習生のときは、教官室に行くなど、検察教官室で飲み会があるからおいでと言われて行ったくらいの記憶しかなく、今の修習生は本当に真面目なんだと感心する。各クラスによってまちまちではあるが、概ね20人くらいは面談を希望するので、1人あたり15分としても5時間かかる。夕方の最終講義が終わり、くたくたになって教官室に戻ってきて、休む暇もなく次々とやってくる修習生と面談するのは体力的にもきつかった。しかも、刑事弁護教官室の面談室は1部屋しかないので、各クラスの教官と修習生が入り交じり、むんむんとした異様な熱気に包まれていた（実は猛暑の中冷房が壊れていた）。しかし、今となってはいい思い出である。3年間の教官生活の中、大変なこともたくさんあったが、やはり最後は修習生のキラキラして希望に満ちたまなざしを見れば、ああやってよかったと思える瞬間がある。自分も成長できたと思う。みんなありがとう。これからも同じ法曹として一緒に頑張ろう。